

[Article]

Early history of education of nurses in Japan

Yoshio Masuda

Aino Gakuin College
Professor Emeritus of Osaka City University

Key words : education of nurses, Chinese medicine, Dutch medicine, arguments on beriberi

日本における看護婦養成教育のはじまり

増 田 芳 雄*

キーワード：看護婦養成教育，漢方，蘭学，脚気論争

はじめに

日本における最初の看護婦養成機関は明治19年(1886)、有志共立東京病院に開設された“看護婦教育所”であったと考えられる。同年、キリスト教関係の外国人によって看護婦養成機関が2つ東京と京都に開設されたが、いずれも短期間で閉鎖された。これに遅れること4年、明治23年(1890)には“日本赤十字社看護婦養成所”が設置された。前者は高木兼寛がつくった有志共立東京病院(のちの慈恵医科大学病院)の附属機関として設置され、後者は佐野常民らによってつくられた博愛社を母体としてできた日本赤十字社に開設された。

近年、我が国には多数の看護系大学、短期大学がつくられ、多くの看護職に就く専門家を養成しているが、本稿では、わが国最初の看護婦養成機関である「有志共立東京病院看護婦教育所」を中心に、日本赤十字社看護婦養成所などと比較しながら、日本における看護婦養成教育の歴史を概観したい。

1. 日本の医学の発展

看護について論ずるにあたり、看護より古い歴史をもち、看護と不即不離の関係にある医学および病院についてまず概観しなければならない。

日本の医学は中国から伝来した漢方に始まる。徳川

時代に至り、長崎出島からオランダ医学を導入したが、明治以後ドイツ医学を大学における主流として消化し、日本の医学は独自の発展を遂げた。それより早く、イギリス医学を取り入れる機縁があったが、ドイツ医学に押され、その一部を残すのみとなった。

1-1. 日本の医学の近代化

江戸鎖国時代、長崎の出島にいたオランダ人の影響は日本の医学および科学技術にとって著しいもので、オランダ商館の続いた200年の間にオランダ医師がのべ150人来航したという。ここに蘭学とオランダ医学が始まった。その詳細は省くが、その一つの成果は安永2年(1773)に出た杉田玄白の「解体新書」であろう¹⁾。日本における近代科学一般の精神と方法はこうして第一歩を踏みだした(湯浅光朗, 1980)。

しかし、蘭方が興隆するにしたがい漢方の反撃は強くなった。徳川幕府は漢方医学の側に立っており、多岐元孝は明和2年(1765)“済寿館”という医学校を江戸に開いた。済寿館はのちに“医学館”と改称され、多岐の子孫がこれを統括した。幕府は外国の翻訳書の出版はすべて医学館の検閲を経なくてはならないという命令を出し、嘉永2年(1849)には外科と眼科

1) 実際に独原書「ターヘル・アナトミア」(実は“J. A. Kulmus: Anatomische Tabellen”のオランダ語訳, 1734)を長崎で明和8年(1771)に入手し、これを訳したのは実質的には中津藩藩医の前野良沢(1723-1803)であったが、杉田玄白の名で刊行された(『世界大百科事典, 平凡社, 1972)。

* 藍野学院短期大学客員教授, 大阪市立大学名誉教授(理学部)

以外はオランダ医学を禁ずる政策をとった。しかし、安政5年（1858）、將軍家定の病に際し、幕府はオランダ流医学の伊東玄朴、戸塚静海らを招き治療に当たさせた。これを契機に、それまでのオランダ医学禁止が解除されるに至った。その前年、安政4年には伊東玄朴らオランダ流医学の医師80余名は神田お玉が池に“種痘館”をつくった。肥前国に生まれ、長崎でシーボルト（Philipp Franz von Sieboldt）に学んだ伊東玄朴は日本における種痘の普及に功が大きい。種痘館は後に（万延元年、1860）幕府に移管され、“種痘所”，そしてその翌年“西洋医学所”と改称された。大槻俊斎が西洋医学所頭取となり、医学所は幕末まで続いた。この間、シーボルトら西洋医学者が日本の医学に多くの寄与をした。

1-2. 幕末・維新の混乱期における病院創設

海軍を創設することを決定した幕府は東京に海軍病院を設立する計画をたて、オランダ陸軍一等軍医ボードイン（Franciscus A. Bauduin）に協力を求めた。彼はオランダのウトレヒト（Utrecht）大学からフローニンゲン（Groningen）大学を卒業、眼科を専攻した医師であった。文久2年（1862）、ボードインは海軍伝習所²⁾ 医官だったポンベ（Meerdervolort van Pompe, 1829-1908）³⁾ のあとを継ぎ、西洋医学の学校兼病院であった長崎の医学所と養生所教師となった（日本歴史人物事典、朝日新聞社、1994）。ボードインは海軍病院設立に必要な医療器具、薬品等を入

手するため、緒方惟準らを伴ってオランダへ帰国した。彼は必要な品を購入して再び来日したが、その時、すなわち幕府の倒れたのちの日本は明治新政府の治めるところとなっており、彼が購入した品は新政府が没収し、ボードインは無視された。彼は憤り、大阪の緒方の許へ身を寄せ、大坂仮病院（学校）（大坂医学校病院）で2年間診療と講義を受け持った。この時期、京都で襲われた明治軍制の創始者・大村益次郎を手術・治療したが、のちに大村は死亡した。彼の教えを受け、医学校取調御用掛に任じられた鍋島藩藩医の相良知安と福井藩の岩佐純が太政官の命によって大阪に赴き、ボードインに医学校で教鞭をとるよう要請した。しかし、彼はこれを受けず、帰国したいと強硬な態度を示した。ボードインは帰国後、東京上野に大学東校の移転が計画されていることを知り、同地の自然環境破壊を阻止、公園化を進言して実現させた。これにより、公園設立100年記念のため「ボードイン顕彰碑」が上野公園内に建てられた。彼は1885年、ハーグ（The Hague）で没した。

この幕末混乱期の文久元年（1861）、イギリス公使館の医師としてスコットランド・エジンバラ（Edinburgh）大学出身のウィリス（William Willis）が来日した。彼は戊辰戦争の際、イギリス公使パークス（Harry S. Parks）の命によって官軍に従って戦場に赴き、戦傷者の治療に当たった。彼はまた、横浜病院⁴⁾において新しい外科医学を駆使して戦傷者の治療に活躍した（日本医史大辞典、河出書房新社、1964）。この横浜病院は東京に移され、東京大病院となり、附属医学所の頭取には緒方洪庵の子・緒方惟準が任じられた。緒方はオランダに留学し、明治維新直後に帰国、朝廷の典藥寮医師になったのち、医学所頭取となった。緒方が辞任し大坂へ去った後の明治2年、鹿児島出身の石神良策が医学所取締となったため、東京大病院は薩摩藩の支配下におかれるに至った。この年、東京大病院は“医学校兼病院”と改称し、ウィリスが主宰し、石神が取締となった。医学校兼病院を主宰していたウィリスは高潔な人格者で、日本医学の最高指導者として相応しい人物であった。戊申戦争後、明治政府は横浜病院を東京に移して“大病院”とし、これに“医学所”を附属させ、ウィリスを病院長とした。さら

2) 安政2年（1855）、オランダは軍艦を幕府に寄贈し、海軍諸術の伝習を献策した。これにより、幕府は長崎在勤の永井尚志に命じ、オランダ人士官らを雇い入れて伝習に着手した。これが“海軍伝習所”で、勝海舟、榎本武揚らが伝習生となった。しかし、伝習所は安政6年（1859）に閉鎖された。一方、幕府は安政4年、江戸に“軍艦教授所”（のちの軍艦操練所、海軍所）を開き、永井を総督とし、教授陣にはすべて長崎海軍伝習所修業者をあてた。その後変遷の末、維新後の明治2年、東京築地に海軍伝習所が創設され、これがのちに海軍兵学校、そして海軍兵学校となった（世界大百科事典、平凡社、1972）。

3) ウトレヒト（Utrecht）大学医学部を卒業、海軍軍医となってオランダ領東インドへ行った。安政4年（1857）、江戸幕府に招かれ、長崎の海軍伝習所医官として来日、間もなく医学講義を始め、日本における西洋医学教育を初めて行った。松本良順、佐藤尚中、長興専斎、戸塚文海らが彼の教育を受けた。文久2年（1861）、日本最初の洋式病院である長崎養生所（のちの精得館、長崎医大の前身）を建てて患者の診療にあたり、また臨床医学の講義をおこなった。

4) アメリカ長老派の宣教医ジェームズ・カーティス・ヘプバーン（James Curtis Hepburn, 1815-1911）は安政6年（1859）来日、横浜で施療所を開いた。彼は和英辞典を“ヘボン式ローマ字”を普及させた。

に医学所は“医学校”と改称され、明治2年(1869)以降、のちの東京大学医科大学の前身となる“大学東校”と呼ばれた。明治政府はやがて総合医科大学を創設し、病院を附属させる構想をもっており、その長にウィリスを任命することを考えていた。こうなれば日本医学の主流はイギリス医学になるはずであった。

このとき、医学校取調御用掛・相良知安と岩佐純が反対の動きに出た。日本にドイツ医学を導入することに力を尽くした相良知安は、精得館でポンペのあとを継いだボードインに学んだ。肥前(佐賀)の藩医の子として生まれた相良は、下総国佐倉の佐藤舜海の蘭学塾“順天堂”に学び、さらにボードインの教えを受けた蘭医であった。明治2年、学校教育を重視した新政府は、政府直系の医学校をつくるため、相良は岩佐玄圭(純)とともに取調御用に任じられた。なお、岩佐純は代々藩医を勤めた福井藩士で、ポンペやボードインについて西洋医学を学び、明治5年、大侍医となった。明治17年、一等待医の資格でドイツに留学、帰朝後も侍医を勤め、明治40年、男爵位を受けた(森鷗外全集, 1985)。

オランダ医学がドイツ医学の系統をふんだものであることを知っていた相良と岩佐は、開成学校教頭として来日していたフルベッキ(Guido Herman Verbeck)のすすめにより日本にはドイツ医学を導入すべき、という確信を持つに至った。すでにイギリス医学を導入することを決定していた明治政府の大学別当・山内容堂(旧土佐藩主)に対し、相良は岩佐と協力し、ドイツ医学の導入を強硬に主張した。その結果、紆余曲折の末、政府は遂にドイツ医学採用の方向に固まるに至った。

こうして、大学東校を統括していた相良知安と岩佐純の、世界に冠たるドイツ医学に範をとるべしという主張が通ったため、大学東校はドイツから教授を招くことになり、陸軍軍医正のミュラー(Leopold Müller)と海軍軍医のホフマン(Theodor Hoffmann)を招き、ドイツ医学の導入に努めた。大学東校は明治10年(1877)、東京大学創設とともに東京大学医科大学となり、以後多くの学生がドイツに留学し、東京大学を中心とする日本の大学ではドイツ医学が主流となった。そして、この方針は第二次世界大戦終了まで続くことになった。

こうなるとウィリスの処遇が政府の頭痛の種となったが、大久保利通ら政府の薩摩藩関係者は石神良策と協議し、ウィリスを鹿児島に招くことにした。明治3年、鹿児島の西洋医院が鹿児島医学校兼病院と名を改

め、校長兼病院長にウィリスが就任した。しかし、理論を重視するドイツ医学に対し、ウィリスによる実践的イギリス医学は以後の日本では定着せず、ウィリスは不遇のうちに明治17年(1884)日本を去り、シャム(タイ)で医療活動をしたのち、1892年暮、病を得て帰国し、1894年2月14日、黄疸のため58才で病没した。このような医学校、病院の変遷は明治の創設期における近代化のための産みの苦しみであったと考えられる(立川昭二, 1986)。

1-3. 病院と看護

病院の歴史を振り返ると(平凡社「世界大百科事典」1972)、西洋においては、古代エジプトで医師は神官階級に属し、神殿が医療の場であった。やがてキリスト教の普及とともに修道院が病院の役割を果たし、尼僧が看護にあたっていた。16世紀に至って修道院でない病院がパリにつくられ、産業革命に先立つ18世紀に至ると、のちに述べる聖トマス病院などイギリスや他のヨーロッパ各地において病院建設の機運が高まったという。

ひるがえって日本では、仏教伝来後、聖徳太子が四天王寺建立のさい、敬田院、悲田院、療病院、施薬院を設けたといわれる。これら悲田院や施薬院という医療施設は江戸時代まで各地につくられた。室町時代の終わりに日本と西洋との交渉が始まり、やがてその交渉は日本人の科学精神を刺激し、医学においても西洋の影響はしだいに大きくなった。16世紀半ば、豊後の大友宗麟は西洋医学によるらい病院と救済院をつくったが、鎖国によりその発展はなかった。

日本における組織的な病院看護の始まりは、文久元年(1860)、幕府が松本良順に命じて長崎に創立した“養生所”(精得館)といわれる。松本が頭取となり、ポンペを教授として迎えた。松本順(良順)は順天堂を創設した佐藤泰然の実子で、戊辰戦争の際には会津、さらに函館に赴き、旧幕府について医療に努めた。しかし幕府倒壊後、新政府に降伏、監房生活ののち、早稲田大学の基礎となった洋風病院“早稲田蘭鑄舎”を設立した。のちに松本は明治6年、初代陸軍軍医総監に就任した。

さらに維新後、明治10年におこった西南の役のさい、元老院議員・佐野常民が救護団体として設立したのが“博愛社”である。佐野は慶応3年、明治6年と2度にわたりヨーロッパで赤十字の組織と活動を見聞し、同様の救護団体を日本にも創ろうと努めた。明治19年、博愛社は万国赤十字に加盟、翌20年、博愛社

は日本赤十字社と改称し、佐野は初代社長となった。日本赤十字社は1952年、日本赤十字社法（昭和27年法律第305号）による特別法人として認められた。

これより早く、イギリス人医師ウィリスが戊辰戦争後、東京大病院の院長となったことはすでに述べた。ウィリスは日本の外科手術の発達に貢献し、医学所、大学東校で外科学の講義をしたが、明治3年、鹿児島に医学学校および病院を開設した。ここに学んだ高木兼寛はウィリスの伝統を引き継いで明治15年、有志共立東京病院を設立した。したがって、松本良順に始まり、赤十字を創設した佐野常民、および外科学のウィリスに学んで有志共立東京病院をつくった高木兼寛は日本における最初の組織的病院の設立者と考えられる。

1-4. 看護婦養成のはじまり

看護婦養成という観点からみると、高木兼寛が聖トーマス病院看護婦学校を範として明治19年、有志共立東京病院につくった附属“看護婦教育所”は日本における看護婦教育機関として最初のものであった。同年、佐野常民も“篤志看護婦会”を創設、明治23年には日本赤十字社にも“看護婦養成所”が設置されたので、この二人は看護婦教育機関をつくった先駆者でもあり、彼らの業績は高く評価される。なお、近代日本の看護の歴史については成書も出ている（木下安子、1969）。

この2つの看護婦養成機関のほか、明治19年、アメリカ長老派協会に所属するツルー夫人（Maria T. True, 1840-1896）によって創設された“桜井女学校看護婦養成所”があった。この女学校は病院を持っていなかったため、実習を帝国大学医科大学に委託した。この学校の卒業生のなかには派出看護婦会を経営した人たちがいたが、卒業生を2回出しただけで閉鎖された（芳賀佐和子、2002）。もう一つの看護婦学校は明治8年（1875）、キリスト教主義に基づき、新島襄によって京都に設立された同志社英学校（のちの同志社大学）に附属した学校として明治19年（1886）につくられた“京都看病婦学校”である。この看護婦学校は桜井女学校と同様、高木の有志共立東京病院看護婦教育所と同様、赤十字の看護婦養成所より早く設置されたわけである。その理念は、病に苦しむ患者の身体をはじめ靈魂を慰安する看護婦を育てることにあつたというが、わずか20年で閉鎖された（大野知代、1998；芳賀佐和子、2002）。

これら、有志共立病院看護婦養成所、日本赤十字看護婦養成所、それに桜井女学校看護婦養成所、および

同志社看護婦学校のほか、順天堂の“看護婦養成所”が知られている（順天堂看護教育100周年記念行事実行委員会、1996）。はじめ天保9年（1838）に塾として千葉・佐倉に創設された順天堂は、明治6年に佐倉から東京へ移り、近代的な病院として発足した。これより先、院長の佐藤尚中は明治政府から医学教育の近代化のための責任者となるよう求められ、順天堂の東京移転前に大学東校の大学大博士に就任した。その後、佐藤は明治5年、大学東校を去り、私立病院“順天堂”を開設した。文政10年（1827）生まれの佐藤はもと山口瞬海といったが、天保13年（1842）佐藤泰然の門に入って西洋医学を修めた。佐藤泰然が佐倉に移ったので、尚中も佐倉に行き、のち佐藤の養子となった。彼は万延元年（1860）長崎に遊学し、ポンペについて研究、佐倉へ帰って「済衆精舎」を設置して教授と診療にあたった。ちなみに、野口英世は一時、順天堂病院の助手を勤めた。日清戦争当時の院長・佐藤進は戦場で看護に尽くしている日本赤十字社の看護婦を見て、看護教育の必要性を認識し、明治29年、看護教育を開始した。こうして“順天堂病院看護婦養成所”が発足し、第一回看護婦生徒15名を募集養成した。この養成所は、大正4年（1915）“順天堂看護婦講習所”と改められた。のちに昭和19年、順天堂医学専門学校が開校され、看護婦講習所は順天堂医学専門学校附属看護婦講習所となり、さらに高等看護学校、看護専門学校、そして順天堂医療短期大学看護学科となった。

のちに桜井女学校看護婦養成所や同志社看護婦学校と同じキリスト教主義に基づいて作られたのが聖路加看護学校である。1900年、来日した聖公会宣教教師トイスラー（R. B. Teusler）が設立した聖路加国際病院に、看護婦養成機関として1920年、“聖路加看護学校”が作られた。この学校は現在聖路加看護大学となっている（聖路加看護大学創立70周年記念誌編集企画委員会、1990）。

これら私立の看護婦養成機関に対し、東京大学医科大学病院では、明治17年、病院の改革の一環として「看護人ノ募集及ヒ其ノ教育法ノ事」が挙げられ、同年から独自の看護婦教育を行った。明治18年、医科大学長・三宅秀はヨーロッパに赴いて看護婦養成の実態調査を行った。帰国後の明治20年（1887）、「看護婦見習規則」を作成した。この年、スコットランド出身のヴェッチ（Agnes Vetch）が看護婦の教員として東京大学医科大学に雇われ、医科大学は看護婦見習生を募集してヴェッチを聴講させた（東京大学医学部

表1 日本の看護婦養成機関（創設者）

明治19年	有志共立東京病院看護婦教育所（高木兼寛, Willis 門下。St. Thomas で学ぶ） 桜井女学校看護婦養成所（True 夫人）2年後閉鎖—東京大学病院 同志社英学校附属京都看護婦教育所（新島 襄），20年後に閉鎖
明治20年	東京大学医科大学病院で看護婦教育（三宅 秀）
明治23年	日本赤十字社看護婦養成所（博愛社, 佐野常民）
明治29年	順天堂病院看護婦養成所（佐藤 進, Pompe に学ぶ）
明治33年	聖路加国際病院附属聖路加看護学校（Teusler）

附属看護学校, 1988)。明治21年10月, 第1回見習生が修了し, 28名に証明書が交付されたが, このうち6名は前記の桜井女学校生徒だったという。以後, 医科大学付属病院は多くの見習生をこの女学校から受け入れている。明治22年, 看病法講習科がつくられ, これは明治42年, 看護法講習科となり, 昭和20年に厚生女学部が発足するまで存続した。これとは別に明治31年(1998), 婦長養成を目的として高等看病講習科が設置された。これら東京大学における看護婦養成機関は第二次世界大戦後の昭和25年, 東京大学医学部附属看護学校として再出発した。

日本の看護婦養成機関はこのような歴史をもつが, 日本人の手によってつくられた最初の看護婦養成教育機関を創設したのは高木兼寛であることに異論はないであろう。なお, 「看護制度」そのものは次のようになっている(看護学大辞典 {第四版}, メジカルフレンド社, 1994)。すなわち, 明治32年に産婆規則, 大正4年に看護婦規則, 昭和16年に保健婦規則が制定されたが, このように助産婦, 看護婦, 保健婦は別々の規則に基づいていた。昭和22年に至り3者が統合されて保健婦助産婦看護婦令となり, 昭和23年7月にこの政令が総合看護の概念による新しい法律「保健婦助産婦看護婦法」として制定され, 現行制度が確立した。以上の看護婦養成教育の初期の歴史を表1にまとめる。

2. 高木兼寛と看護

ウィリスによるイギリス医学を学んで海軍軍医となり, さらにウィリスの推薦で聖トーマス医学校に留学した高木兼寛は, のちに東京大学のドイツ学派, およびこれを採用した陸軍に籍を置く森鷗外ら軍医と「脚気」の原因について大論争を行い, ついに高木の論の正しいことが明らかとなった(板倉聖宣, 1988; 松田 誠, 1990)。この脚気論争の前, 高木は彼の学んだ聖トーマス病院にならい, 明治17年(1884), 貧しい病人を無料診療する施療病院“有志共立東京病院”を設立, 病院長には戸塚文海, 副院長には高木がなっ

た。高木はまた, 看護婦養成の必要性を説き, 聖トーマス病院看護婦養成学校を手本として明治19年, 有志共立東京病院に“看護婦教育所”を設置, 看護婦見習生を募集した。さらに, 高木は優れた見習生を聖トーマス病院看護婦養成学校へ留学させた。看護の重要性を早くから認識し, 日本における看護の体制を確立しようとした高木の先見性は類を見ない。

2-1. 有志共立東京病院（東京慈恵医院）と看護婦教育所

高木は医学の研究と医師の養成機関として“成医会”を設立し, 貧しい病人を診療する目的で寄付を集め, “有志共立東京病院”を発足させた。慈恵会に至るその歴史を表2に示す。この施療病院設立は天聴に達し, 天皇から6,000円の御下賜金を賜った。翌年, 病院総長に有栖川宮威仁親王が就任, 病院長に戸塚文海, 副院長に高木兼寛が任じられ, 4月19日に開院式が行われた。のちにこの病院は“東京慈恵医院”となるが, 皇后や皇室関係からの下賜金で運営された。この病院には後援団体として“婦人慈善会”が設置され, その幹事長は有栖川宮威仁親王御息女, 幹事は伯爵山縣夫人友子, 同松方夫人満佐子, 同大山夫人捨松, 子爵榎本夫人多津子, 伯爵佐々木夫人貞子, 侯爵鍋島夫人栄子, 子爵長岡夫人知久子, 子爵樺山夫人登茂子, 伯爵戸田夫人極子, 公爵毛利夫人安子らが就任した(女学雑誌 68, 1887)。

高木は同時に, イギリスと同様に看護婦の養成を行う必要性を感じ, とりあえず病院で働く女性に看護婦教育を受けさせることにし, アメリカ人宣教看護婦リード(H.E. Reade)を雇い, 看護法を教授させた。しかし, 女性たちはリードの英語による講義を理解できず, 高木は本格的な教育機関を設けなければ優れた看護婦を養成することができないことを痛感した。高木は養成機関設立のための寄金を募集し, 800余名の賛同者により, 6,000円余りの寄付金を集めた。これに婦人慈善会が協力することになり, 6名による支援組織ができた。その6名は伊藤梅子, 井上武子, 川村春子, 松方満佐子, 大山捨松, 佐々木貞子であった。彼女

表2 慈恵会看護教育の歴史（名取禮二，1974 などから）

年	出来事
明治15年（1882）8月	高木ら有志共立東京病院を芝山内に開設
17年	婦人慈善会発足
18年春	病院内に看護婦教育所開設，高木は大正9年まで所長
20年	有志共立東京病院を東京慈恵医院と改名 同時に教育所も東京慈恵医院看護婦教育所となる
40年	社団法人東京慈恵会看護婦教育所と改名
大正10年	東京慈恵会医院医学専門学校が医科大学となり，東京病院は医科大学付属東京病院となる
14年	大学看護教育所のほか附属東京病院看護婦講習所を設置，講習所は大学の事業となる
昭和22年	東京慈恵会医科大学付属病院看護婦養成所となり看護婦養成は大学の事業となる 看護婦教育所と看護婦講習所を合併，東京慈恵会医科大学付属病院看護婦養成所となる
30年	看護婦養成所は再び慈恵会の事業に戻る
25年	慈恵高等看護学院設置
46年	慈恵大学に慈恵第三高等看護学院設置，さらに慈恵第三看護専門学校設置
50年	慈恵大学青戸高等看護学院開校，青戸看護専門学校となる
52年	慈恵看護専門学校となる

らは参議の伊藤博文，井上馨，川村純義，松方正義，大山巖，佐々木高行の夫人であった。ことに大山捨松は明治4年，最初的女子留学生として渡米し，ニュー・ヘイヴン（New Haven）のハイスクールをへてカレッジ卒業後ニュー・ヘイヴン病院の看護婦コースに学んだため，熱心にこの事業に協力したといわれる。

こうして設立された日本最初の看護婦養成機関である看護婦教育所では，初めて生徒見習として13名が採用され，見習い期間をへて行った試験で次の5名を合格者とした。

大石 テル — 23才
吉岡 ヨウ — 23才
鈴木 キク — 23才
近藤 カツ — 26才
板谷 コト — 21才

教育所ではリードが教育したが，やがて彼女は帰国したので，高木は将来日本人によって看護婦を養成したいと考え，優れた生徒を彼の母校である聖トーマス病院附属の看護婦学校へ留学させたいと考えた。こうして明治20年に2人の女生徒がロンドンへ留学した（女学雑誌69，1887）。

2-2. 看護婦留学生

聖トーマス看護学校へ留学したのは看護婦教育所生徒見習の拝志ヨシネと那須セイであった。この二名と同期の看護婦生徒は次の女性たちであった（慈恵看護教育百年史，1974）。

大石 テル（24才），吉岡 ヨウ（24才）
鈴木 キク（24才），近藤 カツ（27才）
板谷 コト（22才），庄田 モヨ（20才）
笹岡 トヨ（20才），島 キン（22才）
清水 ノブ（22才），長川ヨシネ（21才）

拝志ヨシネは慶応2年（1866）伊予国（愛媛県）の生まれ（明治25年死去）で，明治19年（1886）2月，有志共立東京病院看護婦見習，同年4月看護婦教育所生徒となった。明治20年7月23日，生徒の身分で聖トーマス病院看護婦学校へ看護学研修者として出発し，同年9月9日ロンドン着，明治22年11月22日に帰国した。その後，彼女は慈恵医院看護婦を勤め，男室看護婦長兼手術室掛，24年2月には生徒取締役代理となった。のちに病を得て帰郷し静養に努めたが，27才で死去した（芳賀登監修，「日本女性人名辞典」日本図書センター，1993）。

那須セイは大分県の生まれといわれるが生年不詳である。しかし，ロンドンに渡航したのは21才のときとされているので，拝志より1才年少の慶応3年生まれと思われる。明治19年2月有志共立東京病院に勤務，翌明治20年7月23日看護学研修のため，教育所生徒として拝志ヨシネとともに聖トーマス病院看護婦学校へ留学した。明治22年帰国し，東京慈恵医科大学付属病院看護婦を勤め，23年女室看護婦長兼外来診察場掛となったが，24年退職した（同上）。彼女は東京で療養中の宣教師ハリソン夫人を看護した縁で，同夫人の付添看護を兼ねて渡航したといわれる。退職後の消息は不明である（富田仁編，1985）。

こうして，高木の発想で日本初の看護婦留学が行われ，彼女らは学習の成果を大いに生かし，慈恵医大病院で後進のために尽くし，看護に専心したと思われる。のちに，総理大臣・大隈重信が狙撃されたとき，当時日本屈指の外科医・佐藤進が大隈の脚切断の手術を行い，高木がそれを補佐したとき，慈恵病院の看護婦教育所出身の橋村延世，松井トラ，高部マツ，平野チサの4看護婦が手術に協力した。手術後，彼女らは大隈に付ききりで看病したが，大隈夫人は彼女らの献身的

な看病に感嘆したという。医師の指示を機敏に実行し、大隈が苦痛を訴えると適切な処置をとり、万事が行き届いており、彼女らの言葉遣いも丁寧で気品があった。大隈がようやく快方に向かったとき、感動した大隈夫人は、院長の高木に礼状を送り、500円を寄付したという。これを機会に看護婦教育所の成果は大いに高まり、看護婦養成に一層の努力が払われた。

有志共立東京病院看護婦教育所、慈恵医科大学付属看護婦教育所出身の看護婦たちは、国内の病院のほか、派出看護婦としてもめざましい活躍をし、濃尾震災、日清戦争、日露戦争、二・二六事件、大東亜戦争などでも献身的に働いた。教育所における学業、生活などと合わせ、教育所出身看護婦たちに関する資料は「慈恵看護教育百年史」(1974)に詳しい。

2-3. ナイチンゲールと聖トーマス病院看護婦学校

1854年、ナイチンゲールは聖トーマス病院内に看護婦養成所をつくったが、この病院は世界でもっとも古い歴史をもつ(Graves, 1947, 永坂三夫・永坂小千世訳, 1980)。

フローレンス・ナイチンゲール(Florence Nightingale)はイギリスの名門の家の娘として1820年に生まれた。彼女は人生について思索を続けた結果、神の啓示により病人の看護に当たりたいと確信するに至ったといわれる。家族の反対を押し切り、看護の道へ入るため、ドイツのカイザースヴェルト(Kaiserswerth)の修道女を中心とする看護教育を受けることになった。帰国後、クリミア戦争(Creman War, 1853-1856)⁵⁾が始まり、ナイチンゲールは看護団を率いてトルコに赴き、1854年10月21日、彼女の看護団はトルコのスクタリ(Scutari)にある兵舎病院に到着した。敵味方を問わず戦病者を看護した彼女の活躍は高く賞賛され、帰国後「ナイチンゲール基金」が創設された。この基金により、ロンドンの聖トーマス病院内に看護婦養成学校が開校された。この学校によって、近代的職業として訓練された看護婦が誕生す

ることになった(佐藤信一, 1963; 増田芳雄, 1999)。

2-4. カイザースヴェルト学園

ナイチンゲールが学んだドイツ・カイザースヴェルトについては論説・解説があり(大川 治, 1987)、また本学学生が夏期研修のため同地で学んでいる(辰巳恵子・橋本純二, 2002)。

北ドイツの小村カイザースヴェルトにこの学園の基礎をつくったのはテオドール・フリートナー(Theodor Fliedner, 1800-1864)であった。彼はカイザースヴェルトの福音教会の主任司祭として22年間勤めた。この地区の住民の絶望的な経済状態を見たフリートナーは募金をし、教区を立ち直らせる事業に着手した。まず、刑務所生活の改善を試み、1826年、イギリスの範例にならって、囚人の倫理観や市民意識の改善のため、超宗派的な「ライン・ウェストファーレン(Rhein-Westfalen)州刑務所協会」を設立した。つぎに、とくにフリートナーの妻フリーデリケ(Friederike)の強い勧めにより、女性刑了者のため「さ迷える女性を夫人信者の手で介護する事業団」を興し、福音教会ホームを開設した。この事業は成功しなかったが、フリートナーは弊害を根本で断ち切るため、大規模な庶民教育の事業団をつくることにした。そこで1836年、「看護婦およびディアコニッセのための学園」を開設した。ディアコニッセ(Diakonisse)とは、この学園の女教師たちの呼称で、「協会の救済事業、とくに自発的な愛の活動をする人」という意味である。フリートナーはまた1852年、婦人精神科病院を開設した。

看護学校の教育・授業カリキュラムはフリートナー自身が立案し、教授にはカトリック系の病院勤務医でベルリン大学病院外科医テーニッセン(Joseph Thönissen)を迎えた。彼は学園で「患者看護への指針」に従って講義をした。また、看護婦および神学校生徒には一般教養科目の教育を行った。この学園の基本は、即物的なレベルを越える看護で、ディアコニッセの呼び名のとおり、「主イエスの意志を体して貧者や病人に奉仕する女性」の育成にあり、それは今日まで受け継がれているという。

2-5. 聖トーマス病院附属看護婦養成所

さて、ナイチンゲールが看護婦養成所をつくった聖トーマス病院は古い歴史をもつ。この病院は1106年、修道院を母体としてつくられたため、はじめキリストの教えに帰依した人々だけが救済され、世間から絶縁

5) オスマン帝国(トルコ)、イギリス、フランス、サルデーニャ対ロシアの戦争。ニコライ一世のロシアはその南下政策のためトルコの分割を決意し、宗教保護を口実に国交を断絶、トルコを攻撃した。英仏連合軍はトルコ支援のためロシアに宣戦、黒海北側のクリミア半島に上陸し、セヴァストポリ(Sevastopol)を包囲、苦戦の末これを陥落させた。その結果、パリ条約が結ばれ、ロシアの南下政策は挫折、その農奴制社会の弱体を暴露した。

していた。しかし、1553年に至り国立病院となり、一般の人々に解放され、以後ヨーロッパに蔓延したペストの救済など病院としての役割を果たした。1700年、病院に医学校が設置され、医学教育を行うようになった。ここで高木兼寛は学んだわけである。そして1854年にはナイチンゲールによって“看護婦養成所”が設置された。訓練を受けた看護婦を看護という仕事の頂点におくというイギリスにおける新しい看護の革命は1880年代に始まった聖トーマス病院におけるナイチンゲールの影響といわれる（Maggs, 1983, 大西和子監訳, 1991）。

ナイチンゲールが看護学校を聖トーマス病院におくことを決定した理由は、英国のヴィクトリア女王夫妻および病院役員が彼女を熱心に支持したからといわれる（福田邦三ら, 1960）。また、この古く設立された病院は立派に運営されており、近い将来新しい建物を建てる計画があったことも一つの理由であったという。この聖トーマス病院には「婦長の義務」、「シスターの義務」、「看護婦の義務」そして「不寝番の付き添いの義務」が定められていた。このなかから、この病院の看護の精神を知るため、1844年に制定された「看護婦の義務」をここに引用したい（福田邦三ら, 1960）：

- (1) あなたがたは、当病院の婦長とあなたのシスターに対し、何ごとも丁寧、勤勉、かつ従順でなければいけない。あなたがたはいかなる口実があっても、婦長あるいはあなたの病棟のシスターの承諾なくしてこの病院を離れてはならない。
- (2) あなたがたは、自分が世話する担当患者を親切に扱わねばならない。なお患者の身体、寝具、ベッドその他がいつも清潔であるようにしておくこと。また患者に食事や飲み物を気持ちよい状態で与えること。
- (3) あなたがたは、外科医が患者の包帯手当をする全時間、それにしたがってその手当の助手を勤め、汚れた巻包帯、当てもの、その他すべてをとり除き、清潔なものに代えておかねばならない。
- (4) あなたがたは、湿布を要する患者には、内科医または外科医の指示があるたびに、指示どおりに湿布をしなければならぬ。病室で命ぜられたり与えられたりするすべての薬や治療の適用および作用等に気をつけねばならない。
- (5) あなたがたは、衰弱し、身体不自由な患者に

はいつでも付き添って介助ができるよう、常に手近な場所に待機していなければならない。

- (6) あなたがたは、衰弱し、身体の不自由な患者に処方されるすべての流動食、あるいは他の適切な食物を調理し、またすべての飲み物を温めなければならない。
- (7) あなたがたは病室のすべてのベッドを整える。病室全体のベッド、床、テーブル、長椅子、廊下、階段、屋根裏部屋等を磨いたり、清潔にしたりしなければならない。この場合あなたがたは、シスターが、あなたがたの手伝いをさせも良いと考える患者に仕事を手伝わせてもよい。
- (8) あなたがたは、ビールの缶、スープの桶鍋、肉皿、皿等をいつも清潔に磨いておかななくてはならない。
- (9) ビール配給ベルが鳴ると、あなたがたは酒類管理用務員長の傍に行かなければならない。病室まで無事にビールを運ぶことのできる患者と一緒に連れていき、途中で飲まれるのを黙認しないで、缶がすっかり病室へ運ばれたかどうかを調べなければならない（以下省略）。
- (10) あなたがたは、病室で使用されるすべての不潔な巻包帯、布きれ、当てもの等を洗わねばならない。そのため執事から割当量の石鹼を月決めで受け取ること。あなたがたは自分の怠慢で巻包帯、当てもの等が一つとして失ったり、台無しになったりすることのないよう、管理しなければならない。
- (11) あなたがたは、衰弱や病気のため介助を必要とする患者の身体や寝具等を清潔にしなければならない。

当時は感染が多かったためか、清潔がとくに強調されているのは興味深い。オーストリア・ウィーン大学の産科医・ゼンメルヴァイス（Ignaz Philipp Semmelweis, 1818-1865）は産褥熱の原因を突き止め、それを産科の診療に当たる医師の手や、使用する器具の不潔によると力説した。ゼンメルヴァイスはハンガリーの生まれで、はじめブダペストで法律を学んだが、1840年、ウィーン大学に入り、医学を修めた。のちに1854年、ブダペスト大学教授となった。彼の感染防御により産婦死亡率は1848年には18.3%から1.3%に低下した（南和嘉男, 1961）。ゼンメルヴァイスの感染防御は当時の医学界ではなかなか受け入れられなかったというが、彼の感染防御と相前後して発見、

開発された「無痛法」（麻酔法）は外科手術の近代療法への目覚ましい発展を可能ならしめた。こうして、19世紀半ばにいたり、感染と清潔という考えがしだいに広まったと考えられる。この聖トーマス病院の運営方法を有志共立東京病院でも採用したものとわれ、看護婦教育所でも上記のような「看護婦の義務」が教えられたのであろう。

1860年、ナイチンゲール基金審議会と聖トーマス病院の間に契約が成立し、看護婦養成学校は開校された。そして、看護婦養成学校長には、聖トーマス病院の婦長・ウォードロバー（Sarah Elisabeth Wardrober）が任命された。以後、この学校から多くの看護婦が卒業し、英国内のみならず欧州各地で活躍した。高木兼寛は、聖トーマス病院医学校に留学中、ナイチンゲールの看護婦養成学校を視察する機会に恵まれ、その充実した教育を目の当たりに見ることができた。帰国後、高木はナイチンゲール看護婦養成学校の教育方針を指針とし、日本に招いたアメリカ人宣教看護婦リードの指導で、有志共立東京病院に看護婦教育所を設置したわけで、その意味では、日本の看護婦養成の基本概念は現在もなおナイチンゲールの理想を伝承している。それは彼女の学んだカイザースヴェルトの精神である「主イエスの意志を体して貧者や病人に奉仕する女性」であるディアコニッセ（Diakonisse、

大川 治、1987）の伝統を受けるものと考えられる。

3. 高木 兼 寛

慈恵病院、そして看護婦教育所をつくった高木兼寛は森鷗外との「脚気論争」で知られている（板倉聖宣、1988）。これについては後に述べたいが、まずその医師としての経歴を見たい（松田 誠、1990；高木喜寛、1998）。

3-1. 高木兼寛の経歴

高木は1849年（嘉永2年）9月15日、日向国東諸県郡穆佐村（むかさ、現宮崎県高岡町）で大工・喜介の子として生まれた。幼名を藤四郎といったが、塾に学び、のちに医師を志して蘭方医・石神良策に師事した（表3）。石神は薩摩・川内の藩士の子であったが、長崎に遊学し、嘉永3年に鹿児島へ戻り、医塾を開いていた。高木は石神について医学とオランダ語を学んでいたが、慶応3年、薩摩藩から隊付の医者として従軍することを命じられた。こうして高木は慶応4年、鳥羽伏見の戦い、さらに戊申戦争に従軍した。帰国後、高木は恩師石神の推薦で鹿児島医学校学生となり、ウィリスに学んだが、明治5年、兵部省出仕となっていた石神の招きで海軍病院の医員に推薦され、海軍九

表3 高木兼寛の経歴（松田 誠、1990；高木喜寛、1998 などから）

年	経 歴
嘉永 2年 (1849)	宮崎に生まれる（9月15日）
安政 3年	中村敬助について四書五経を学ぶ
慶応 2年	鹿児島に出、石神良策の門に入り、医学を学ぶ
3年	岩崎俊斎に蘭学を学ぶ。戊辰戦争に薩摩軍の軍医として従軍
明治 2年	鹿児島で藩立開成学校に入学する
3年	鹿児島医学校校長ウィリスに医学・英語を学ぶ
明治 5年	海軍省に九等出仕、中軍医、大軍医となる
7年	海軍少医監となる
8年	ロンドンのセント・トーマス病院医学校へ留学
13年	イギリス外科学校で優秀な成績をおさめて帰朝、海軍へ帰任、海軍病院長を命ぜられる
14年	成医会を結成、会頭となり、さらに成医会講習所を設置、所長となる。海軍大医監に任ぜられる
15年	有志共立東京病院を開設。脚気問題について天皇に拝謁する
17年	海軍軍医本部長兼医学舎長を命ぜられる。
19年	海軍軍医総監に任ぜられ、海軍軍医本部長となる。有志共立病院内に我が国最初の看護学校、看護婦教育所を開設する。
20年	有志共立東京病院を東京慈恵医院と改称し、院長となる。
21年	日本初の医学博士を授与される
23年	成医会講習所を成医学校とする
24年	勲二等瑞宝章を賜る。セント・トーマスにならい東京慈恵医院医学校を創設
25年	貴族院議員に勅撰される
34年	東京市会議員に当選
36年	東京慈恵医院医学校を東京慈恵医院医学専門学校に昇格、校長となる
38年	男爵に列せられる
39年	コロンビア、フィラデルフィアなど各大学から名誉学位を授与
40年	社団法人東京慈恵会を設立、東京慈恵医院を東京慈恵会医院と改称、院長となる
41年	東京慈恵医院医学専門学校を私立東京慈恵会医院医学専門学校と改称
大正 9年	死去（4月13日）

等出仕に任じられた。

明治6年、海軍病院内に海軍病院学舎（のちの海軍軍医学校）が創設され、聖トーマス病院附属医学校出身のアンダーソン（William Anderson）が教官として招かれた。これは、大学東校における医学がドイツ流であるのに対し、欧米と関係の深い海軍ではイギリス流の医学と英語を必要としたからであった。高木はアンダーソンとも親しく交わり、勤務に精励し、海軍少医監に進級した。明治8年6月、高木は海軍兵学校海外留学生として聖トーマス病院附属医学校へ留学することになった。純粋に医学研究のためイギリスへ留学した最初の人物である。学資が一年に1,000円、支度金が100円だったという。聖トーマスにおいて丸5年半にわたる医学研鑽の後、高木は明治13年11月帰朝し、海軍病院長となった。

当時、日本の医学界はドイツ医学に傾倒していたが、これに批判的な者もあり、その一人は松山棟庵であった。松山は天保10年（1839）紀伊国の生れで、オランダ医学、イギリス医学を学んだのち、明治4年、文部省に招かれて大学東校の大助教に任命されたが、明治6年、辞任して慶応義塾に設けられた医学所の所長となった。さらに松山は明治8年、東京医学会社を創設したが、慶応医学所も閉鎖され、政府にイギリス医学採用を求めた松山は失意の底にあった。高木と知り合った松山は、病人治療と直接結びつくイギリス医学を修める医師を養成する学校をつくるべきであると考えており、この両者の意見が一致し、明治11年、“成医会”を設置した。高木は海軍病院長の重責の傍ら“成医会講習所”の約100名の学生に講義をし、医師の育成に努めた。さらに貧しい病人を無料で診療する施療病院として有志共立東京病院を有志の寄付によって発足させた。明治16年、施療病院設立のことが明治天皇の耳に達し、6,000円の御下賜金を賜った。総長には有栖川宮が就任、病院長に戸塚文海、副院長に高木が就任した。

高木は海軍軍医総監としても多忙な日を送っていたが、有志共立東京病院を一層充実したものとするため、皇后の援助を得て“東京慈恵医院”と改称、自ら院長となった。この年、看護婦教育所生徒の2名を聖トーマス病院看護婦学校に留学させた。明治22年10月18日、大隈重信が爆弾によって負傷し、高木は大隈の治療に努めた。この間、高木は「脚気」をめぐる東京帝大、陸軍と対立していたが、日露戦争中も海軍では高木の功績により脚気は消滅、戦後欧米に招かれて各地で講演した。後に男爵に列せられたが、病を得て

大正9年4月13日、72才で没した。同日、従二位に叙せられ、旭日大受章を授与された。彼が設立した東京慈恵会医院医学専門学校は、大正11年10月19日、日本で最初の私立単科医科大学として認可され、東京慈恵会医科大学と改称した。

「病気を診ずして、病人を診よ」、「医師と看護婦は車の両輪の如し」という高木兼寛の言葉は、建学の精神として今も慈恵会に受け継がれているという（芳賀佐和子、2002）。

3-2. 高木兼寛と脚気論争

高木兼寛といえば東京慈恵医科大学および附属看護婦教育所の創設者としてだけでなく、日本特有の風土病ともいわれた「脚気」（beriberi）の治療で名をあげた人物として知られる（松田 誠、1990；高木喜寛、1998）。イギリス医学を学び、海軍軍医として活躍した高木は、ドイツ医学を本流とする東京帝国大学とこれに依拠する陸軍と対立した。この「脚気論争」に関しては成書が多いので（たとえば板倉聖宣、1988）、本稿では概略を述べることにしたい。

脚気は江戸時代以来多くの人が罹り、将軍のなかにも脚気で死んだ者がいた。脚気にかかった人は、まず脚がだるく、疲れやすくなり、手足が痺れ、動悸がし、食欲不振、足がむくみ、さらに歩行が困難になって視力も衰え、心臓麻痺を起こして死ぬ。脚気の原因は不明で、治療法はなく、明治になっても患者の数は増えるばかりであった。明治天皇は心を痛み、政府に補助金を出して脚気の研究を奨励した。

海軍軍医・高木兼寛は洞察力に優れ、興味ある事実が気が付いた。それは海外に練習航海をした軍艦「筑波」（1,978トン）の行動記録であった。乗組員のほか海軍生徒47名を乗せて明治8年（1875）11月6日、品川を出帆、ハワイ・ホノルルを経てサンフランシスコに入港、翌明治9年4月14日に帰国した。航海日数160日であった。奇妙なことに、航海中には脚気患者が多発したが、ホノルル、サンフランシスコ停泊中には一人の脚気患者も出なかった。

さらに高木は、明治11年、筑波がオーストラリアへ練習航海したときの記録についても調査した。海軍生徒41名を乗せて1月17日に出発、7ヶ月後に帰国した。この航海でも、シドニー停泊中は脚気患者は発生せず、帰航航海中に患者が増え、乗組員生徒合計146名中、47名が発病し、帰国と同時に海軍病院に入院させた。

もし、脚気が伝染病であるなら、航海中だけでなく、

外国に停泊中にも発病者が出るはずであった。海軍の乗組員中、脚気患者は水兵に限られ、士官の患者は極めて少なかった。これらの事実から高木は、摂取する食物に原因があるのではないかと考えた。水兵は粗末な副食による米飯を常食とし、士官は洋風の食事をしてきた。そこで高木はまず海軍病院内で患者の食事を日本食と洋食に分けて4週間にわたる実験を行った。日本食を摂取した患者の体重は変化せず、脚気を発病したが、洋食を摂取した者は、体重は減ったが、脚気は発症しなかった。明治17年、筑波は再び遠洋航海にでることになった。高木は海軍大臣など海軍省の上層部に申請を繰り返し、苦労の末、ようやく筑波で自分の計画による栄養実験を行うことになった。乗組員は、333名で、そのうち士官・準士官が35名、海軍生徒25名、下士官48名、水兵188名、準卒7名であった。食事内容の詳細は省略するが、従来の米食のほか、牛乳、豆類、麦、肉類、ビスケットなどを加えた。

この遠洋航海で筑波はニュージーランドから南米チリ、ハワイと回り、11月16日に東京湾へ帰着したが、ホノルル到着の時、艦長から高木に「ビョウシャーニンモナシアンシンアレ」と電報が届き、高木は安堵したという。帰着後、海軍病院に収容された3人の患者は肺病、角膜潰瘍、血尿病で、脚気患者は1名もいなかった。各地停泊のほか、航海日数は52日間であった。こうして脚気栄養説の高木兼寛の考えは証明されたかに見えた。

しかし、東京大学と陸軍では、新進医学の興隆するドイツ医学、ことに華々しく勃興した細菌学を学んでいた。コッホ (Robert Koch, 1843-1910) が破傷風、結核の病原体を発見、純粹培養に成功し、他のドイツの細菌学者たちもレプラ菌、淋菌、肺炎菌などを発見した。彼らに学んだ東京大学医科大学の緒方正規、陸軍の石黒忠恵らは脚気はバクテリアによると判断し、高木の説に反対する論を展開し始めた。明治27、8年、日清戦争が勃発し、日本は清国に勝利したが、この戦争における日本軍の戦死者977名、戦傷死者293名、それに病死者20,159名であった。病気に罹った兵士の内訳をみると、脚気が34,783名、このうちの死者3,944名と、戦死者をはるかに上回る惨状であった。このような状況にもかかわらず、陸軍軍医総監・石黒を中心とした陸軍医学中枢部は、その後も白米を主食とする兵食制度を堅持し続けた。それは陸軍軍医・森林太郎の「陸軍兵食試験」を信じたため、森は脚気がバクテリアによるものとして「陸軍兵食論」を著し、高木の栄養説を否定、米食至上主義を唱えていた。

しかし、陸軍のなかにも石黒、森の考えに疑問を持つ者がおり、近衛連隊では、大阪陸軍病院長の堀内利国を招いて実験を行った。2大隊のうち、1大隊には米飯のみを与え、他的大隊には麦飯を与え、行軍させた。後者にはほとんど脚気患者が出なかったため、「麦飯ノ効驗アル確實ナルコトヲ知ラレタリ」という結論に達した。それにもかかわらず、明治37、8年の日露戦争では、陸軍の全兵員中211,600余名が脚気に冒され、27,800名が死亡し、脚気は再び論議の渦中に入った。やがて“脚気病調査会”が政府によって設立され、「イギリス流偏屈学者」とか「麦食偏信者」などと呼ばれた高木兼寛の正当さが認められるようになった。そして、鈴木梅太郎のビタミンB₁発見(米糠から得たので、イネの学名 *Oryza sativa* をとってオリザニン—Oryzanin と呼ばれた)により、脚気の原因は解明され、高木の正しさが証明された。

文学において偉業をなした森林太郎(鷗外)は、東京大学医学部の後押しもあって、この脚気論争において陸軍兵食に関する致命的な誤りを犯し、その誤りに固執したため、陸軍に重大な損害を与えた。その責任は鷗外の文学的令名に陰を落としているという(坂内正, 2001)。脚気論争にかぎらず、戦争においても陸軍と海軍の相克は改まらず、それは大東亜戦争まで尾をひき、日本敗戦の一つの原因となった。

4. 日本赤十字社

西南戦争を契機に“博愛社”が佐野常民によってつくられたのが明治10年(1877)であった。これに対し、国際赤十字の歴史は1859年にさかのぼる。国際赤十字社に加盟している日本も含め、赤十字社は広範な活躍をしており、くわしい情報が多い(佐藤信一, 1963; 日赤中央女子短大史研究会, 1985など)。

4-1. 国際赤十字社

イタリア統一戦争のとき、ソルフェリーノ(マジェンタ・ソルフェリーノ, Magenta and Solferino)の戦い⁶⁾(1859)をみたスイスの実業家デュナン

6) フランス・サルディーニア連合軍はミラノ西方でオーストリア軍を破り、ついでヴェローナ西方のソルフェリーノで激戦の末オーストリア軍を破った。しかし、サルディーニアによるイタリア統一の実現を恐れたナポレオン3世はオーストリアと和を結び、サルディーニアのイタリア統一運動を裏切った。しかし、最後はサルディーニア王国を中心とするイタリア統一は第2次イタリア戦争ののち1860年に達成された。

(Jean Henri Dunant, 1828-1910) は看護されることもなく戦場で苦しんでいる傷兵の惨状を見、篤志家を集めて傷兵の収容と看護に尽した。これを契機にデュナンは、戦時の傷病兵救護のため国際的な運動をおこし、1863年、公益協会長、軍人、法律家の協力を得て、赤十字創設のための委員会をつくった。そして、スイス政府の尽力により、ジュネーヴで16カ国36代表の参加のもとに国際会議が1864年開かれた。ここで条約がきめられ、条約に加盟した国は政府の承認した1国1社の赤十字社(篤志救護協会)をつくって条約の完全履行に協力する、というジュネーヴ条約が調印された。そして、1867年、第1回赤十字国際会議が開かれた。功績のあったデュナンは1901年、第1回ノーベル平和賞を授与された。赤十字の旗は、デュナンの母国にちなみ、スイス国旗の赤と白を反対にしたものに制定された。

博愛社が万国赤十字社に加盟したのが明治19年で、日本赤十字社と改称されたのは明治20年(1887)であった。日本赤十字社に関しては多くの文献があり(たとえば佐藤信一, 1963)、本稿では創設者・佐野常民および看護婦養成所について触れておきたい。

4-2. 佐野常民

佐野は1823年(文政6年)佐賀藩士・下村充賀の五男として生まれたが、天保3年(1832)、佐賀藩医・佐野常徴の養子となった(富田 仁編, 1985)。安政2年(1855)22歳のとき海軍伝習生として長崎に学び、慶応3年(1867)藩命によってパリ万国博覧会に赴き、産業と軍事を視察した。帰国後、佐賀藩の兵制を改革したが、明治3年(1870)新政府によばれて兵部少丞に任じられた。以後、工部権少丞、工部少丞、工部大丞兼灯台頭をへて明治6年(1873)、弁理公使としてイタリア、オーストリアに勤務し、ウィーンの万国博覧会には副総裁として出席した。帰国後、元老院議員のとき、明治10年(1877)に西南戦争がおこり、戦争の惨状を見て“博愛社”を創設、官賊の区別をせず傷病者を救療した。明治13年(1880)には佐野は元老院議員から大蔵卿となり、さらに明治15年(1882)、元老院議長、明治21年、枢密顧問官、明治25年農商務大臣となった。この間、明治19年(1886)、博愛社病院が設立され、我が国における最初の看護婦組織である“篤志看護婦会”がつくられた。同年、赤十字条約に加盟し、翌年、博愛社は日本赤十字社と改称し、佐野はその社長となり、経営に尽力した。同年、子爵を授けられ、日清戦争のさいの救護事

業の功によって伯爵を授与された。明治35年(1902)没。

4-3. 日本赤十字社と看護婦養成所

明治18年、高木らによって有志共立東京病院に看護婦教育所が設置されて以来、翌明治19年頃から正規の看護婦を養成するための教育機関を設置する動きが出てきた。明治23年4月に“日本赤十字社看護婦養成所”が創設された。昭和38年現在では、東京を始め北海道から九州までの各地に赤十字の看護婦養成機関は40カ所近くある(佐藤信一, 1963)。現在ではさらに短期大学および4年制看護大学が設立されている(日赤中央女子短大史研究会編, 1985)。

日本赤十字社看護婦養成所は有志共立東京病院看護婦教育所を範として設立され、明治25年には看護婦の服装、患者取扱規則および看護婦規則に関しても照会が寄せられた。博愛社病院開設時に病院では10名の看護婦が働いていたというが、彼女らは看護教育を受けていなかった。明治20年に篤志看護婦人会が発足し、明治23年に“看護婦養成所”が設置された。最初の教員8名は赤十字社病院医員で、看護婦生徒は10名であった(日赤中央女子短大史研究会編, 1985)。その出身は士族8名、平民2名だったという。のちにこの養成所は中央女子専門学校、中央女子短大、さらに幹部看護婦教育部を付置、1986年には看護大学へと発展している(日本赤十字中央女子短期大学, 1980; 樋口康子, 2002)。

他方、すでに述べた京都の同志社病院でも看護婦の養成、教育の目標、入学のための必要条件、教科内容、実習方法などについて病院長が明治19年に看護教育の必要性を説いている。この“同志社病院看護婦学校”は明治26年6月初の卒業生を出し、高木兼寛は祝辞を送っている。慈恵会病院とくらべると赤十字の規模は全国的で大きい。歴史的に見ると、赤十字の活動は国内に留まらず、とくに戦争時における海外での活躍が目立つ。戦争の際に派遣された救護員(看護婦)と救護をした患者を表3に示すように(佐藤信一, 1963)、19-20世紀においては、とくに戦争中の活動の広範さがわかる(榎居 孝, 1999)。

慈恵会とくらべ、国際赤十字に加盟している赤十字が規模の大きい活動をしてきたもとの理由は、慈恵会創設者・高木兼寛と日本赤十字の創設者である佐野常民との違い、および、活動範囲の違いがあったのではないかと思われる。高木はイギリス医学を学んだ医師であったのに対し、佐野常民は、はじめ医学を学

表4 赤十字の戦時救護班派遣数（佐藤信一，1963）

戦 争	救護員(看護婦)数	患者数
西南戦争(博愛社)	126	1,429
日清戦争	10,397	101,675
北清戦争	450	12,835
日露戦争	4,847	1,110,220
日独戦争(第一次世界大戦)	194	3,160
英国派遣	24	2,856
仏国派遣	27	910
露国派遣	18	496
シベリア事変	記載なし	56,834
サガレン派遣	46	12,327
済南事変	37	690
満州事変	637	455,016
大東亜戦争	33,156	記載なし

んだが、やがて科学一般を修め、明治維新に活躍、政治家として重きをなした人物であった。このため、赤十字社は皇室との関係も深く、名誉総裁には皇后陛下、初代総裁には小松宮彰仁親王を仰ぎ、以後歴代総裁には親王が就任している。また、社長には初代の佐野常民のあと、第2代社長には松方正義ら、社長には著名な政治家らが就任している（佐藤信一，1963）。また、赤十字は表4にも示すように、その活動はとくに戦争にさいして発揮されている。このように、赤十字社はいわば国家的事業としてだけでなく、国際赤十字の一員として国際的な規模で発展を続け、現在に至っている。大正10年、2人の赤十字看護婦が第1回ナイチンゲール記章を受けている。その2人は山本ヤヲと萩原タケであった⁷⁾。

む す び

2002年春以後、従来の呼称「看護婦」は「看護師」と改称されることになり、論議を呼んでいる（大野知代，2002）。イギリスやドイツに始まる専門職業としての看護婦の活動は人道に基づいており、医師との緊密な協力が看護婦の仕事の基本になっていることは聖トーマス病院の「看護婦の義務」に記されているとおりで、日本の博愛社も慈恵会の教育所も同様の精神で設立されたわけである。現在でも、看護師は医師に協力し患者の看護にあたるのが職務とされており、人道上、極めて重要な職業である。“師”とは人に教える授ける立場の職を指すわけであるから、医師に協力し

7) 「日本女性人名辞典」(日本図書センター)から。この情報を下さった安井信子氏に感謝する。山本ヤヲは、安井氏の夫君、経済学者の故安井琢磨・大阪大学名誉教授、文化勲章受章者の母堂の従姉妹に当たる。

て患者のケアに当たるだけでなく、後進の指導者としての役割が「看護師」には期待されている。しかし、筆者ら一般に「患者」の立場にある者にとっては看護師は、やはり優しい「白衣の天使」といわれる看護婦さんであり続けてほしいものである。

専門分野の異なる筆者と看護界との接触が藍野学院短期大学で始まってから4年余を経た。筆者は、かねてから高木兼寛と森鷗外との対立、私学と東京大学との対立、そして海軍と陸軍との対立から生じた「脚気論争」に興味を持っていたが、その高木兼寛が日本の看護婦養成教育の先駆者であること知り、その歴史を知りたいと思い始めた。時間とともに看護婦養成教育の歴史に対する筆者の関心はしだいに強くなり、その結果、資料を調べてまとめてみたいと考えるようになった。それは、筆者自身の興味のほか、看護や看護教育にたずさわる方々は日常の多忙な活動のため、自らの職とする分野の歴史をひもどく暇がないのではなからうかと思ったからでもある。医学にも看護にも部外者である筆者が本稿で述べた内容は的外れである可能性があることは否定できないので、読者の叱正を頂ければ幸いである。

日本における看護大学・短大など看護師養成機関は質量ともに拡充されつつあり、とくに看護学、看護研究の重要さが指摘されている（増田芳雄・塚 俊明，2000）。ここで看護婦養成教育の歴史を振り返ることに意義あればよいと筆者は願っている。

謝 辞

本稿を執筆するに当たり、いろいろとご示唆を頂いた学長・塚 俊明博士および副学長・野村公寿博士、そして学科長・大野知代教授に深謝する。また、資料収集にご協力下さった藍野学院図書館・増田徹氏、および帝塚山大学学園前キャンパス図書館・蔭山久子氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 福田邦三・永坂三夫・久永小千世(1960) 聖トーマス病院ナイチンゲール看護婦養成学校100年の歩み、1860-1960. 日本看護協会出版会。
 Graves, C. (1947) The story of St. Thomas 1106-1947.
 永坂三夫・永坂小千世訳、福田邦三 校閲(1980) セント・トーマス病院物語。日本看護協会出版会。
 芳賀佐和子(2001) 私学の個性を生かした看護教育——歴史からの発想。日本私立看護系大学協会会誌8: 1-2。
 芳賀 登 監修(1993) 日本女性人名辞典。日本図書セン

- ター。
- 樋口康子（2002）看護学——知へのあくなき探求。古希を祝う会。
- 板倉聖宣（1988）模倣の時代，上下。仮説社。
- 順天堂看護教育100周年記念行事実行委員会（1996）順天堂看護教育100周年記念誌。同委員会。
- 木下安子（1969）近代日本看護史。メジカルフレンド社。
- Maggs, C. J. (1983) The Origin of General Nursing. Intern. Thompson Publ. Services Ltd.
- 大西和子 監訳（1991）近代看護の起源。相川書房。
- 榊居 孝（1999）世界と日本の赤十字。タイムス。
- 増田芳雄（1999）ナイチンゲールと19世紀ヨーロッパ。藍野文庫15：11-20。
- 増田芳雄・堺 俊明（2000）看護学雑誌「Nursing Research」(NR)の編集長 Florence S. Downs 博士による“Editorial”から見たアメリカにおける看護学，看護研究の実状について。藍野学院紀要14：101-119。
- 松田 誠（1990）脚気をなくした男・高木兼寛伝。講談社。
- 南 和嘉男（1988）医師ゼンメルワイスの悲劇。今日の医療改革への提言。講談社。
- 森 鷗外（1985）独逸日記。森鷗外全集7。筑摩全集類聚。筑摩書房。
- 名取禮二（1974）慈恵看護教育百年史。東京慈恵会。
- 日本赤十字中央女子短期大学（1980）日本赤十字中央女子短期大学90年史。同短期大学。
- 日赤中央女子短大史研究会（1988）日本赤十字看護教育のあゆみ。博愛社から日赤中央女子短大まで。蒼生書房。
- 大川 治（1987）翻訳と解説：Sticker, D. A. “Theodor Fliedner” (1800-1864). 藍野文庫4：208-230。
- 大野知代（1998）母性看護実習における「専門性」形成に関する研究——生命誕生の場面に関わる学生の実習内容の分析を通して——。早稲田大学大学院教育学研究科修士論文。
- 大野知代（2002）「看護婦」から「看護師」への名称変更に関する看護学生の認識調査。藍野学院紀要16：47-51。
- 坂内 正（2001）鷗外最大の悲劇。新潮選書，新潮社。
- 佐藤信一（1963）赤十字百年。朝日出版。
- 聖路加看護大学創立70周年記念誌編集企画委員会（1990）聖路加看護大学の70年。聖路加看護大学。
- 立川昭二（1986）明治医事往来。新潮社。
- 高木喜寛（1998）高木兼寛伝。伝記双書305 大空社。
- 辰巳恵子・櫛木純二（2002）カイザースヴェルト学園での研修。看護教育43：1-4。
- 東京大学医学部附属看護学校45周年記念誌出版委員会（1988）看護教育百八年のあゆみ。東京大学医学部附属看護学校。
- 富田 仁 編（1985）海を越えた日本人名事典。日外アソシエーツ。
- 吉村龍子（2001）日赤の創始者 佐野常民。吉川弘文館。
- 湯浅光朗（1980）日本の科学技術100年史。自然選書，中央公論社。